

## 缶やペットボトルはなぜ中をすすいで捨てるのか

リサイクル自体の有効性については研究者の間では様々な意見がありますが、現状(のルール)に即して対応していくことが肝要と思います。

### 選別工程は殆どが手作業

飲料の空き缶やペットボトルは、なぜ中をすすいでから捨てるのでしょうか？ その大きな理由としては、選別を殆ど手作業で行っていること、中身が残っていると品質が落ち再資源化に支障をきたすことが挙げられます。尼崎市の家庭から出された「びん・缶・ペットボトル」はすべて、資源リサイクルセンターの選別施設に運ばれてきます。その作業の大半は手作業で「びん・缶・ペットボトル」を材料や色ごとに分けて行きます。機械を使って分けるのは磁石にくっつく「スチール缶」だけです。

資源リサイクルセンターの選別施設で分けている「びん・缶・ペットボトル」は以下の通りです。

- びん (手作業で透明、茶色、緑色、青色の4種類に分別します)
- スチール缶 (磁石で回収して、プレスをします)
- アルミ缶 (手作業で回収して、プレスはしません)
- ペットボトル (手作業で回収して、プレスをします)



### 処理再生の現場で働く人たち

飲んだまま捨てる、缶に匂いが付着したままの状態になります。するとどうなるのでしょうか。収集は毎日行われるわけではないので、リサイクルセンターに運ばれてくる間にも、匂いは腐敗臭に変わっていきます。回収されたビンや缶はセンターに運び込まれますが、その先は手作業が続きます。

市町村によって処理工程は若干違いますが、まずはビン・缶が袋に入れられた袋を破って除去する作業があります。次はビン・缶をコンベアに乗せて、選別作業。缶の場合は、缶として出されたものの中に、不要になった鍋、ペンキの缶やエアゾール缶があったり、時には機械部品が入っていたり、時にはステンレス包丁が入っていることもあります。ガラスビンやペットボトル、木くず、そういうものもよく入っているようです。これらは手で分別せざるを得ません。分別後にスチール缶はプレスに回されます。ビンの場合も同様です。異物を除去されたビンはさらに色ごとに分けられ、決められた場所にストックされます。

これらの工程では耐え難い異臭に包まれます。気温が高くなれば、ビールや飲料の残液、缶に残ったその他食品の腐敗も進み、気化も激しくなります。数が集積されると、大変な臭気です。わけの分からない腐敗臭が鼻をつき、体にまとわりつくのです。特に夏場は熱気と臭気が室内にこもり、「現場で一日働いていたら、その臭いは体に染みついて、風呂に入ってもなかなか抜けない」とある市の作業の方にはこぼします。そしてその現場にある程度の期間いると、嗅覚が狂いかねないそうです。全自動をうたい文句にした選別機械もないではありませんが、非常に

高価な上に分別の性能が低いので、できた再資源物の品質が落ちて、売却価格が安くなってしまいます。またト  
ラブルや故障も多く、人の手と目に勝る機械はないのが実情です。

この臭気が作業者の健康にどんな影響を及ぼすのかは、まとまった臨床データもなく検証されていません。悪臭  
防止法という法律もありますが、発生の原因となる特定の化学物質から生じる臭気に対する規制なので、こういう  
腐敗物が発する混合ガスのようなものに対しては規制が及ばないのです。

## 実情にそった対応

東京都内の処理場の中には、市街地に建設をしたため、膨大な臭気対策をしたところもありますが、その建設費、  
ランニングコストともに大変な金額になっているそうです。それは税金で賄われています。その税を負担すること  
と各家庭が軽く洗って出すのと、どちらが合理的でしょうか。

とにかく、リサイクルの現場で働く人の健康と安全を考えて、せめて職場や家庭においてはビン、缶、ペットボ  
トルなどはすすいで出したいです。ラベルやキャップ、飲み残し、異物混入があると作業は余計に手間取り、さら  
に仕事は過酷さを増すので、これらも捨てる際には分別したいです。

中にはすすいだり、ラベルを剥がしたりする少しの手間を惜しんだり、「水道水がもったいない」「リサイクル  
自体が無意味」「コスト的に見合わない」などの理屈でそのまま捨てる人もいます。

個人的には色々な考え方はあるのですが、現場の実情をしっかりと捉え、地域社会のルールを遵守してい  
きたいところです。すすぎや分別は、効率的な資源回収のためだけではなく、収集や処理に関わって働いて下さ  
る人々に向けての配慮と感謝の気持ちも含んでいます。資源回収を地球環境への配慮としてだけでなく、相手理解と  
しても捉えていくことが大切です。

**\*ラベルやキャップ付OK、潰して出す、可燃物で出すなど、自治体によっては出し方が違うことがある。**

## 影で支える人々

目立ちたくない人や人々への、目立ちたくない協力や感謝 … 自分があるってまわりがあるのではなく、まわり(の  
存在)があってこそ自分(の存在)がある…ものの見方、感じ方を研ぎ澄ましていくと、そういった見えない(見えに  
くい)部分や自分の立ち位置もだんだんと見えてくることでしょう。ペットボトルのすすぎは、そうした類のひと  
つです。人との関わりを通して何をどう学び、どうしていくべきかは、感性、感じ方に関わってきます。こうした  
生きて学ぶ力、生きて働く力は、子どもたちだけでなく自身にも問われています。光と影…見える部分、目立つ所  
には、皆がこぞって取り組み協力します。その一方で些細な行いが、地道に社会や組織を支える人々への感謝と協  
力に繋がっています。

ペットボトルも品質によって、再資源の有効性が違ってきます。現在は他の製品へのリサイクルが主ですが、最も効率よ  
いとされる「PET to PETボトル(ペットボトルに再生できるペットボトル)」の開発も進んでいます。